

# 現代大学生のふれ合い恐怖的心性と自己愛傾向の関係について

秦 幸江

(久保克彦ゼミ)

## 問 題

### 1. 青年期特有のサブクリニカルな症状

少人数のゼミの時間などに、自分の発表の順番が回ってくるまでの間、ドキドキする胸の鼓動に緊張している自分を感じたり、あるいは結婚式などのスピーチを頼まれたのはよいが、たくさんの出席者の前であがってしまい、あらかじめ考えてきた話の内容も忘れてしまって、頭が真っ白になり、冷や汗をびっしょりかくといった経験は誰しにも起こりうる経験である。対人恐怖とは、このような対人場面での人見知りや生理的反応を伴う緊張、予期不安などの広く一般的に認められるレベルのものから、赤面恐怖や視線恐怖などの構造化された症状をもつ神経症水準のもの、加害恐怖的ニュアンスを伴い関係妄想性を有するような「重症対人恐怖症」「思春期妄想症」などと呼ばれる重篤なものまで、幅広いスペクトラムを有する症候群としてとらえることができる。「対人恐怖」という名称から、外的対象としての自分以外の他者を恐怖する病態がイメージされるが、赤面したり動揺したりしている自己の姿の露呈を恐れる、いわば「独り相撲の病理」というところに対人恐怖の本質がある。そしてこれは、自意識が高まる思春期や青年期に好発し、成人期・中年期に達すると自然軽快するといわれている。

具体的な症状としては、自分の顔が赤くなるのを恐れる「赤面恐怖」、他者の視線が気になる「視線恐怖」、自分の視線が他者に不快感を与えるのではないかと気にする「自己視線恐怖」、自分の表情がおかしいと思われているのではないかと気に病む「表情恐怖」、自分が吃ってしまうことを恐れる「吃音恐怖」、人が見ているところで字を書く際に手が震えてしまう「書痙」、人のいるところでは排尿ができない「排尿困難恐怖」、人と同席の場面での食事に困難を覚える「会食恐怖」、

自分から嫌な臭いが出て周囲の人に不快な思いをさせていると思ひ込む「自己臭恐怖」、自分の外見上の醜さが他者に不快感を呼び起こしているとする「醜形恐怖」などがあげられる。

従来、この対人恐怖は、日本に多く見られ海外での報告が少ないことから、集団の和を重んじる日本文化の特質と密接に関係する日本固有の神経症と考えられていた。しかし、近年欧米において、コフト（Kohut, H.）による自己愛理論の台頭を契機に自己愛性人格障害の研究が進み、「恥」に関する精神分析的研究が注目されるようになったことと並行して、対人恐怖が必ずしも日本固有のものではないと考えられるようになってきている。

また、岡野（1998）は、対人恐怖症者が最も恐れ忌み嫌う感情である「恥」と自己愛の関係に着目した。岡野（1998）は、恥と自己愛が表裏一体の関係にあり、自己愛的な欲求の破綻により生まれる感覚が恥であるとしている。そして恥の感覚の代表的なものとして、羞恥（shyness）と恥辱（shame）を挙げている。恥じらいやはいにかみなども含む羞恥は、自分が他者の注目を急に浴びるような状況で、他者と異なることを突然意識したときに反射的に生じる感情であり、それは自分が優れている場合にも劣っている場合にも生じる。羞恥のレベルにおいては、その感情を抱く本人がそれほど悩むことはない。一方、恥辱はもう少し深刻で、自己価値の低下や自分自身に対する不甲斐なさを感じるものである。そして、対人恐怖は恥辱の感覚が深刻に本人を悩ませている状態であると、岡野（1998）は説明している。

山田（1992）は、現代の青年たちは浅い付き合いはさらさらとうまくこなし、一見生まれつき明るい性格のように見えるが、深い付き合いや親友をつくるのはうまくないという指摘をしている。かつて我が国の青少年のノイローゼの三分の二を

占めたのは対人恐怖であった。それが昭和50年頃から変化してきている。この指摘の理由としては、わが国では元来、しつけや道徳、モラルの規準は、人と世間との間に置かれていた。つまり、「世間に恥じない人間になれ」といった言い方であらわされていた。このように、日本の文化は「恥の意識」をつくることをモットーとする「恥の文化」であり、武士道も儒教もそれを支えてきたといえる。したがって、対人恐怖が激減したことは、日本からこの「恥」の文化が消失してしまったことがうかがえる。このことはまた、かつてのように、強い男のイメージを理想モデルとして育てられた青年時代から、近頃はやさしさ志向となり、強くなければ恥だというしつけがなくなってしまうことが関係あるのではないかと山田（1992）は示唆している。

このような昔からの対人恐怖が減少した代わりに、現在の日本の大学世代の青年に特徴的に見られる対人恐怖の型として、山田・安東・宮川・奥田（1987）や山田（1989）は「ふれ合い恐怖」という症候群を指摘している。すなわち、これまでみられた対人恐怖は、人と人が出会い顔見知りになる場面（出会い場面）において発症しやすいのに対して、「ふれ合い恐怖」では顔見知りからより親密な関係に発展する場面（ふれ合い場面）での困難が中心となるとされている。そのため、情緒的な深まりを欠いた対人関係にとどまりやすく、とくに友人などとの会食や雑談場面での困難が中核的な症状とされている。すなわち、「ふれ合い恐怖」の青年は、形式的・機械的な関係や、情緒的な深まりのない場面は問題なくこなせるが、対人関係が深まる場面において困難を感じるものと考えられている。また、従来型の対人恐怖が中学生から高校生にかけて多く発症するのに対し、この「ふれ合い恐怖」は大学生年代に多く見られること、臨床的な問題をもつ青年においても、その病理はあまり重篤ではないことなどの特徴が挙げられている。

以下は、従来の対人恐怖と、前述のふれ合い恐怖との区別をしながら、詳しい特徴を説明する。人間関係はまず「出会い」にはじまり、時間がたつにつれて「ふれ合い」の仲へとすすんでいかなければならない。従来の対人恐怖は、その「出会

いの場」で、もうたじろぐことで生起する。ところが、ふれ合い恐怖の場合、その出会いの場は適当にこなすことができる。つまり、浅い付き合いは上手にこなすことができるのだが、付き合いが長くなってもふれ合いに進むことができないとされる。「ふれ合いの場」にうまく対応できず、たじろぐからである。昔からの対人恐怖の人は、出会いの場面、つまり、ちょっとした顔見知りレベルの浅い付き合いの相手に対して、張り合おうとするような、対抗心から強く振る舞いたいとする傾向があった。ところがそれができないため、恥を感じ、自分の弱い部分が出て、あたかも人を恐れるような恐怖症状が出るというものである。一方、ふれ合い恐怖の場合は、顔見知りになって、長く付き合っても打とけ合えないので、逆にだんだんと相手と疎遠になり、人との空間の共有が長引くほど不安定になるのである。従ってまず、発症する“場”と時間性が従来の対人恐怖と異なるといえる。次に、従来の対人恐怖は徐々に学校に来なくなって、不登校になることが多いが、それでもクラブやサークルには自己を強化するため、つまり弱い自分を鍛え直したいといった意味で入部することがある。しかし、それは一般には長続きしない。ところが、ふれ合い恐怖の方は、学校にむしろ100%出ることができる。そして、知的な場で不安は生じない。実験などではリーダーシップをとって、みんなに教えたりさえするのに、これが終わると、昼食を誘われはしないかと不安になってそそくさといなくなってしまうのである。従って、知的能力を発揮する場面では強いが、情緒的なつながりを必要とする場面では弱いといえる。さらに、従来の対人恐怖は、原則として見物人がいると、たとえば外国人との会話で横で日本人が見ていると、しどろもどろになってしまうような三者関係が弱いといえる。ところが、ふれ合い恐怖の方は、二者関係の方が不得意といえる。つまり、自分が話したり雑談したりしなければ一対一の間（ま）がもてない場となると、重圧感を感じるのは、場の雰囲気敏感になり、自分の責任と感じやすいところがあるといえる。ところが、二者関係であっても、ふれあい恐怖は自分を100%受け入れてくれるような母性的な、つまり受容的な相手に対しては生起しないとされている。相

手から声をかけ、相手から自分を引っ張りこんでくれるような場面ではこの恐怖は起きないのである。

## 2. 対人恐怖と自己愛に関する過去の研究

対人恐怖症は、日本などにおける文化特異的な恐怖症（不安障害）の疾病単位として知られている（アメリカ精神医学会，1996）。他者を恐れ、対人関係を回避する点でこれと類似した疾病単位としては、対人不安（social anxiety）、社会恐怖、回避性人格障害が挙げられる。この社会恐怖が、相互独立的自己感を背景にした欧米文化で、他者からの影響を恐れ、「個」としての自己防衛のために対人関係を回避する特徴を持つものに対して、対人恐怖症は日本などの相互協力的自己感を背景とする文化において、「関係」の中での自己の喪失に対する懸念や「関係」に対する過剰な配慮などの特徴が見られるといった相違点が指摘されている（谷，1997）。

自己愛について初めて体系的な記述をしたのはFreudであり、その記述以降、多くの精神分析学者たちがさまざまな形で自己愛を論じるようになった。Freudは、単なる自己の身体各部分に対する性的愛着としての自体愛と、自己という統一的な身体表象に対する愛情としての自己愛を厳密に区別した（小此木，1985）。そしてFreudは自己愛を、自体愛から対象関係に至る中間段階として位置付けた。自体愛とは、自己愛（性リビドーの自我自身への補給）の対象としての全体的・統一的な自我が成立する以前の、自己の身体の部分のみが満足の源泉となる段階のことである。Freudは、統合された自我が成立し、それが性欲動の対象となるに至って初めて自己愛が成立するとした。

青年期は多かれ少なかれ自己愛的な特徴がみられる時期である。しかし、自己愛的な特徴は青年期によくみられるが、青年期の自己愛的な特徴は必ずしも自己愛性人格障害に移行することを意味するわけではない（アメリカ精神医学会，1994）。青年期には自意識が強まり、自分が他者の目にどのように映っているか、他者が自分のことをどのように思っているかを気にするようになる。ここで他者の目に映ってほしいのは、すぐれた有能な自分自身の姿である。このように青年期の自意識

の強まりというのは、自己愛的な願望の表れととらえることもできる（上地・宮下，2004）。

また、青年期は父母からの精神的離脱と個の自立が基本的な課題となる。父母からの精神的離脱が課題となる青年にとって重要な「他者」とは、周囲にいる友人や仲間、そして恋人であるといえるだろう。そのような他者に自分が優れていることを認められたい、注目されたいという欲求をもつことや、周囲に自分の有能さを認めさせようとするまうことが、青年期の自己愛の特徴といえる。

小塩（2002）は理論的に指摘される2種類の自己愛を考慮した上で、自己愛傾向の観点から青年を分類した。対人関係と適応の観点から各群の特徴を明らかとしたこの研究では、自己愛傾向が全体的に高い者は、低い者に比べて対人恐怖傾向を示さず、攻撃的で個人志向的な特徴を示すとした。また、自己愛傾向が全体的に高い者のうち、「注目・賞賛欲求」が優位な者は、相対的に対人恐怖的で間接的な攻撃を行い、社会志向的で精神的に不健康を示す傾向にある。その一方で「自己主張性」が優位な者は、対人恐怖傾向を示さず言語的な攻撃を行い、個人志向的で精神的に健康な者であるといえるとした。また、友人関係と自己愛傾向について検討した小塩（1998）の研究では、広い友人関係を取る青年ほど自己愛的な傾向が高く、とくに広く浅い関わり方をする青年は、「注目・賞賛欲求」因子での得点が高かった。反対に、深い友人関係を取る青年は、自己愛が低く、自己評価が高いという結果を導いている。

Kohutが青年期に親からの分離に伴って自己愛性人格障害の臨床症状を露呈すると述べている（伊藤，1992）ように、青年期という発達的一段階は自己愛の病理と密接にかかわっている。その一方で、DSM - IV（アメリカ精神医学会，1994）に指摘されているように、自己愛的な特性は青年期によくみられるが、青年期の自己愛的な特性は必ずしも自己愛性人格障害に移行することを意味しない。このように、青年期は自己愛性人格障害が発症しやすい年齢であると同時に、病理まではいかなくとも、自己愛的な特徴が表面に現れやすい時期であるといえる。

青年期を迎えると、人は社会という開かれた世界へと足を踏み出していく。その過程を通じ、住

み慣れた拠り所である家族から離れていくが、こうした独り立ちに際しては、自分というものを強く意識し、その存在を周りに認めてもらおうとする気持ちも強まって、自己愛的な状態が生じやすくなるのである(中島, 1998)。このように、青年期は自己愛の高まる時期であるといわれている。

## 目 的

青年期の特徴として、それぞれ「ふれあい恐怖」と「自己愛傾向」を挙げることができる。

岡田(1993)は、クラスター分析によって内省傾向が低く、なおかつ対人恐怖的な心性が比較的低い群を抽出しており、この群を「ふれ合い恐怖の心性」として扱っている。また、清水・海塚(2002)の研究では、青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向との関連について検討することを目的とした。その研究において、自己愛傾向も対人恐怖心性も低いことから、自己に対しての関心が非常に低い群を「ふれ合い恐怖の心性」に類似した群として抽出している。このように、対人恐怖という視点からふれ合い恐怖の心性と自己愛の関連が述べられたはたくさんあるが、純粹にふれ合い恐怖の心性と自己愛との関連について調査された研究はほとんど見当たらなかった。そこで本研究では、岡田(2002)による「ふれ合い恐怖尺度」と、小塩(1998)による「自己愛人格目録短縮版(NPI-S)」を用いることで、ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向の関連について調査する。また、ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向のそれぞれの男女差というものに関しても、過去研究と比較しつつ調査することを目的とする。

## 仮 説

仮説1 ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向には負の相関がある。

ふれ合い恐怖には情緒的な場面を回避する傾向が考えられる。つまり、父母からの自立心が高まる青年にとって、重要な「他者」とは周囲にいる友人や仲間、そして恋人である。そのような他者に自分が優れていることを認められたい、注目されたいという欲求をもったり、周囲に自分の有能さを認めさせようとふるまうといった青年期の自己愛の特徴と情緒的な場面を回避するふれ合い恐

怖とは負の相関関係をもつ。このことから、ふれ合い恐怖の心性の傾向を高く持つ者は、自己愛傾向が低いのではないかという仮説が考えられる。

仮説2 自己愛傾向は女子よりも男子の方が高い。

自己愛傾向として挙げられる「注目されたい」という欲求や「認められたい」という欲求は、比較的社會や親が男子にそうあれと願う傾向であると考えられる。また仮に、女子がこの欲求を公にすると、周囲からは奇異の目で見られることが想定される。以上のように、ジェンダーといった性別役割や男女の生育歴の違いから、男子により高い自己愛傾向がみられるのではないかという仮説が考えられる。

過去の研究では、男女で有意な差が見られないという結果と、男子の得点の方が高いという結果に分かれている。しかしながら、男女に有意な得点差はみられないと報告されているいずれの研究においても、男子の方が女子よりも得点が高い傾向にある(小塩, 2004)。また、小塩(1998)は自己愛傾向が女性性別観よりも男性性別観に関連することを、中村・松並(2001)は男性性別・女性性別の双方を有するアンドロジニー群が最も自己愛傾向が高い傾向にあることを報告している。

仮説3 ふれ合い恐怖の心性は男子よりも女子の方が高い。

男子よりも女子の方がグループを作って行動を共にすることを望み、また無意識的に孤立することを恐れる傾向がある。従って、表面上は円滑にグループ行動を行えていても、ふれ合い恐怖を体感する機会は男子よりも女子の方が多いと考えられる。

## 方 法

### 質問紙の構成

回答者には基本的属性要因：学年・年齢・性別について記入させた。

ふれ合い恐怖尺度：ふれ合い恐怖の心性を測定する尺度として、岡田(2002)が作成した「ふれ合い恐怖尺度(17項目)」を用いた。17の各項目について「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」の5段階で評定させた。

自己愛人格目録短縮版 (NPI-S)：自己愛の程度を測定するために、小塩 (1998) が作成した自己愛人格目録を使用した。30の各項目について「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」の5段階で評定させた。

#### 調査対象

京都学園大学に在籍する大学生 (計192名) を対象とした。回答者の内訳は表1に示した。また、回答者全体の平均年齢は19.7歳 ( $SD=1.29$ ) であった。

#### 調査時期・形式

2008年6月から7月にかけて授業時間内等に実施した。回答所要時間はおよそ10分であった。また、質問紙については無記名で記入させた。

表1 アンケート回答者の内訳

性別	学生				総計
	1年生	2年生	3年生	4年生	
女	22	44	8	11	85
男	45	28	12	22	107
総計	67	72	20	33	192

## 結果の処理

ふれ合い恐怖尺度の回答は5件法で求め、各項目への回答に対して1～5点を「全く当てはまらない (1点)」～「とてもよく当てはまる (5点)」のように各項目に与えた。ただし逆転項目である項目4「昼食は友達と一緒に食べるのが好きである」と項目14「大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ」は評定点を逆転させたため、「全く当てはまらない (5点)」～「とてもよく当てはまる (1点)」とした。自己愛人格目録短縮版の回答もまた5件法で求め、各項目への回答に対して1～5点を「全く当てはまらない (1点)」～「とてもよく当てはまる (5点)」のように各項目に与えた。

#### (1) 因子分析の結果

ふれ合い恐怖尺度と自己愛傾向尺度の各項目に関して主因子法による因子分析を行った。その結果から、因子負荷率が4以上をもつ項目に基づいて各因子を解釈した。これら因子分析の結果は、それぞれ表2、表3に示した。

表2 ふれ合い恐怖尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II
<b>第1因子(対人退却)</b>		
項目16) 他人と親しくなるのはうっとおしい	<b>0.702</b>	-0.008
項目3) 人と雑談するのは苦手だ	<b>0.667</b>	0.175
項目14) 大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ (R)	<b>0.661</b>	-0.226
項目17) できることなら人とあまり関わりになりたくない	<b>0.66</b>	0.088
項目9) 友達と一緒に食事をするのは好きでない	<b>0.643</b>	-0.082
項目6) 友達と一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ	<b>0.627</b>	0.086
項目2) できれば食事は一人でとりたい	<b>0.624</b>	-0.15
項目4) 昼食は友達と一緒に食べるのが好きである (R)	<b>0.613</b>	-0.234
項目5) 友人数人である場面は苦手だ	<b>0.558</b>	0.024
項目7) 人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ	<b>0.447</b>	0.187
項目13) 一人で趣味に没頭していたい	0.377	0.23
項目1) 友達と2人きりでいる場面は苦手だ	0.375	0.16
<b>第2因子(関係調整不全)</b>		
項目8) 人という場面で言葉がなくなってしんとしてしまわないかと不安になる	-0.128	<b>0.725</b>
項目11) 他人とちょうど良い距離をとるのが難しい	-0.104	<b>0.712</b>
項目12) 人といても話題がなくて困ることが多い	0.2	<b>0.696</b>
項目10) 他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする	-0.166	<b>0.641</b>
項目15) 他の人は自分を受け入れてくれない	0.148	<b>0.527</b>

因子間相関FII 0.342

(R)は逆転項目

## 現代大学生のふれ合い恐ろしい心性と自己愛傾向の関係について

表3 自己愛傾向尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

	I	II	III
<b>第1因子（優越感・有能感）</b>			
項目1) 私は、才能に恵まれた人間であると思う	<b>0.843</b>	-0.113	-0.086
項目7) 私は、周りの人たちより有能な人間であると思う	<b>0.819</b>	-0.145	0.049
項目4) 私は、周りの人たちより、すぐれた才能を持っていると思う	<b>0.787</b>	-0.129	-0.035
項目16) 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	<b>0.754</b>	0.063	0.052
項目10) 私は、周りの人が学ぶだけの値打のある長所を持っている	<b>0.693</b>	0.102	-0.022
項目25) 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	<b>0.654</b>	-0.178	0.044
項目28) 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う	<b>0.514</b>	0.204	-0.105
項目19) 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	<b>0.43</b>	0.152	0.041
項目21) いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	0.388	0.15	0.225
項目13) 周りの人たちは、私の才能を認めてくれる	0.383	0.056	0.001
項目17) 私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい	0.365	0.225	0.076
項目22) 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	0.28	0.092	0.146
<b>第2因子（注目・賞賛欲求）</b>			
項目5) 私は、みんなからほめられたいと思っている	-0.261	<b>0.844</b>	0.029
項目23) 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	0.082	<b>0.763</b>	-0.042
項目8) 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	-0.037	<b>0.744</b>	0.068
項目26) 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている	0.287	<b>0.713</b>	-0.187
項目14) 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	-0.037	<b>0.664</b>	-0.034
項目2) 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	0.046	<b>0.633</b>	0.177
項目11) 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる	-0.059	<b>0.484</b>	-0.12
項目29) 人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる	0.047	<b>0.45</b>	-0.19
項目20) 機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい	0.221	0.373	0.198
<b>第3因子（自己主張）</b>			
項目24) 私は、自己主張が強いほうだと思う	-0.109	0.121	<b>0.761</b>
項目3) 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	0.013	-0.105	<b>0.74</b>
項目30) 私は、個性の強い人間だと思う	-0.145	0.145	<b>0.558</b>
項目12) 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ	0.152	-0.171	<b>0.541</b>
項目9) 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている	0.065	-0.268	<b>0.536</b>
項目27) 私は、自分独自のやり方を通す方だ	-0.013	-0.026	<b>0.529</b>
項目18) これまで私は自分の思い通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う	0.024	-0.148	<b>0.419</b>
項目15) 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う	0.057	0.074	0.395
項目6) 私は、控え目な人間とは正反対の人間だと思う	0.17	0.084	0.379
因子間相関FII	0.441		
FIII	0.53	0.405	

まず、ふれ合い恐怖尺度の場合、因子数を設定せずに因子分析を行った結果当初3つの因子が抽出されたが、スクリープロットと、先行研究の結果を参考にして、最終的に2つの因子に絞った。第Ⅰ因子は「他人と親しくなるのはうっとおしい」「人と雑談するのは苦手だ」などの項目から成り立つ。また、第Ⅱ因子は「人という場面で言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる」「他人とちょうど良い距離をとるのが難しい」などの項目から成り立つ。これらの結果は、各々岡田(2002)による「対人退却」因子と「関係調整不全」因子に類似しているため、これらを用いて、第Ⅰ因子を「対人退却」、第Ⅱ因子を「関係調整不全」と命名した。

次に、自己愛傾向尺度の場合、因子数を設定せずに因子分析を行った結果、当初7つの因子が抽出されたが、スクリープロットと、先行研究の結果を参考にして、最終的に3つの因子に絞った。第Ⅰ因子は「私は、才能に恵まれた人間であると思う」「私は、周りの人たちよりすぐれた才能を持っていると思う」などの項目から成り立つ。また、第Ⅱ因子は「私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある」「私は、みんなの人気者になりたいと思っている」などの項目から成り立つ。そして第Ⅲ因子は「私は、自己主張が強いほうだと思う」「私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う」などの項目から成り立っている。これらの結果は、それぞれ小塩(1999)による「優越感・有能感」因子と「注目・賞賛欲求」因子、「自己主張」因子に類似しているため、第Ⅰ因子を「優越感・有能感」、第Ⅱ因子を「注目・賞賛欲求」、第Ⅲ因子を「自己主張」とした。

## (2) 男女差の $t$ 検定の結果

ふれ合い恐怖尺度得点において、男女差を比較するため  $t$  検定を行ったが、男女間のふれ合い恐怖得点に差がないといえる ( $t(190) = .411, n.s.$ )。

次に自己愛傾向尺度得点において、男女差を比較するため  $t$  検定を行った。その結果男女間の自己愛傾向尺度得点に有意な差が認められた ( $t(190) = 2.199, p < .05$ )。したがって女子よりも男子のほうが自己愛傾向は高いといえる。

## (3) ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向の関連

まず、ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向の関連を示すために散布図を図1に示した。このことから、一見ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向はほぼ無相関であるかのように思われる。

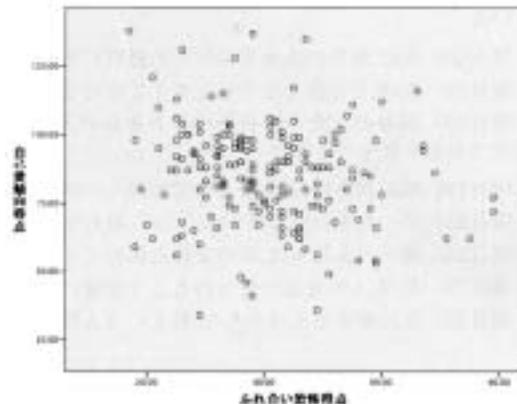


図1 ふれ合い恐怖尺度得点と自己愛傾向得点の散布図

さらに、ふれ合い恐怖の心性と自己愛傾向との相関関係を分析したところ、これら2つの心的傾向にごく弱い相関関係がみられた ( $r = -.165, p < .05$ )。次に、それぞれの尺度の下位尺度による相関関係を調べたところ、以下のように有意な差が認められた。

まず、ふれ合い恐怖の因子である「対人退却」と自己愛傾向の因子との相関関係については、第1に自己愛傾向の因子である「優越感・有能感」にはほとんど相関関係が見られなかった ( $r = -.011, n.s.$ )。第2に、自己愛傾向の因子である「注目賞賛欲求」にはやや相関関係があるといえた ( $r = -.205, p < .01$ )。第3に、自己愛傾向の因子である「自己主張」には相関がみられなかった ( $r = -.047, n.s.$ )。

次に、ふれ合い恐怖の因子である「関係調整不全」と自己愛傾向の因子との相関関係については、第1に自己愛傾向の下位尺度である「優越感・有能感」にはごく弱い相関関係がみられた ( $r = -.174, p < .05$ )。第2に、自己愛傾向の因子である「注目賞賛欲求」にはやや相関があるといえる ( $r = -.211, p < .01$ )。第3に、自己愛傾向の因子である「自己主張」にはやや相関があるといえる ( $r = -$

.194,  $p < .01$ ).

これらふれ合い恐怖的心性と自己愛傾向における、それぞれの下位側面との関係を表す相関表を表4に示した。

表4 ふれ合い恐怖尺度得点と自己愛傾向得点の散布図

	Factor1 (対人退却)	Factor2 (関係不全)	ふれ合い恐怖尺度 ・尺度合計得点
Factor1(優越感・有能感)	-0.011	-0.174*	-0.077
Factor2(注目・賞賛欲求)	-0.205**	0.211**	-0.071
Factor3(自己主張)	-0.047	-0.194**	-0.116
NPI-S・尺度合計得点	-0.165*	-0.093	-0.165*

## 考 察

### (1) 因子分析の結果

回収したアンケート結果から、ふれ合い恐怖尺度と自己愛傾向尺度の因子分析をそれぞれ行った。その結果、ふれ合い恐怖は「対人退却」と「関係調整不全」という2つの因子が判明し、自己愛傾向は「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張」の3つの因子が判明した。この結果は、それぞれ岡田(2002)と小塩(1997)の因子分析の結果とほぼ類似した結果となった。まず、ふれ合い恐怖の因子である「対人退却」は、「他人と親しくなるのはうっとおしい」「人と雑談するのは苦手だ」などの項目から成り立つ。また、「関係不全」は「人といる場面で言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる」「他人とちょうど良い距離をとるのが難しい」などの項目から成り立つ。以上のことから、「対人退却」は、外部からの接近が自分のプライベートな部分を侵害するよう感じられてしまう因子であると解釈できる。さらに「関係調整不全」は、外部からの接近に対してどう反応していいかわからず不安であるといった因子であると解釈できる。

次に、自己愛傾向の因子である「優越感・有能感」は、「私は、才能に恵まれた人間であると思う」「私は、周りの人たちよりすぐれた才能を持っていると思う」などの項目から成り立つ。また、「注目・賞賛欲求」は「私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある」「私は、みんなの人気者になりたいと思っている」などの項目から成り立つ。そして「自己主張」は「私は、自己主張が強いほうだと思う」「私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う」などの項目からな

る。小塩(1997)によると、「優越感・有能感」は、自分が才能に恵まれており、他者よりも優れていて有能であるといった強い自己肯定感を表す因子だといえる。また、「注目・賞賛欲求」は、自分が他者に注目されたり賞賛されたりすることを期待する欲求を表している因子だといえる。そして、「自己主張性」は、自分の意見をはっきりと言い、自ら決断を行うといった、やや自己中心的な意味をもつ因子であるといえる。

### (2) ふれ合い恐怖と自己愛傾向の関連

ふれ合い恐怖尺度とNPI-Sの相関表から、ふれ合い恐怖的心性の因子と自己愛傾向の因子は、ほとんどの組み合わせにおいてばらつきは認められる一方で、全体的に負の相関を示していた。これは清水・海塚(2002)における対人恐怖と自己愛の関連についての研究結果に一致する形となった。また、ふれ合い恐怖と自己愛傾向の相関係数は、あまり高くないが弱い負の相関を示しているという結果となっている。このふれ合い恐怖的心性の高いものが自己愛傾向が低いというこの結果は、これもまた、清水・海塚(2002)によって検出された「ふれ合い恐怖」を示したクラスターと類似した結果となった。

各尺度の因子同士の相関係数において、統計的に有意な値が検出されたものは、以下の通りである。第1に、ふれ合い恐怖的心性の因子である「対人退却」と自己愛傾向の因子である「注目・賞賛欲求」との負の相関、第2に、ふれ合い恐怖的心性の因子である「関係調整不全」と自己愛傾向の因子である「注目・賞賛欲求」との正の相関、第3に、ふれ合い恐怖的心性の因子である「関係調整不全」と自己愛傾向の因子である「自己主張」の負の相関である。

まず、自己愛傾向における下位側面である「注目・賞賛欲求」において、ふれ合い恐怖的心性の下位側面である「対人退却」が負の相関を示したのに対し、「関係調整不全」が正の相関を示したことに注目したい。小塩(2004)は、自己愛傾向が高く注目・賞賛欲求が優位な青年の特徴として、他者からの否定的な評価によって崩れてしまうような不安定で高い自己肯定感をもつことを挙げている。このことから、「注目・賞賛欲求」が高い

者は他者からの注目や賞賛を得ることで、自己肯定感を維持しようと試みており、注目や賞賛を与えてくれる他者を求めることから、対人関係を重視し、友人に対して理解や評価、関与を要求する傾向にあると考えられる。そして、「対人退却」が「注目・賞賛欲求」と負の相関を示したということは、「注目・賞賛欲求」が他者からの注目や賞賛、そして権威を求める欲求であるため、ふれ合い場面から退却する傾向にある「対人退却」はその欲求とは逆の性質をもつため、そのような結果になったと考えられる。しかしながら、ふれあい恐怖は前述したとおり、情緒的な交流が行き交うふれ合い場面には弱い、知的能力を発揮する場ではふれ合い恐怖の心性をもたない青年と同等にその場をこなすことができる。それゆえに、ふれ合い恐怖の下位側面である対人退却傾向が高くとも、その知的能力を発揮できる場では「注目・賞賛欲求」を満たすことが可能なのではないかと考えられる。次に正の相関を示した「注目・賞賛欲求」と「関係調整不全」であるが、外部からの接近に対してどう反応していいかわからず不安を想定できる因子である「関係調整不全」は、その不安を解消するため他者からの注目や賞賛を得ようとしていると考えられる。それゆえに分析の結果、正の相関を示したのではないかと想定できる。最後に、負の相関を示した「自己主張」と「関係調整不全」である小塩（2004）によると「自己主張」は、自分の意見をはっきりと言い、自ら決断を行い、やや自己中心的な意味合いをもつ自己愛傾向の下位側面であるとしている。このことから、「自己主張」は他者を気にせず積極的に他者とかかわりをもつといった安定した自己肯定感に関連していると考えられる。他者からの評価によって覆りにくい安定した自己安定感をもつことが、他者に対する積極的な態度や深い友人関係につながることを示唆している。このことから、ふれ合い恐怖の下位側面である「関係調整不全」が、「自己主張」の他者を気にせず積極的に他者とかかわりをもつという性質を阻害している可能性が考えられる。しかしながら、前述した自己愛傾向の下位側面である「注目・賞賛欲求」とふれ合い恐怖の下位側面である「対人退却」との関連と同じく、「対人退却」傾向が高くともふれ合い場面ではな

く知的能力を発揮する場面では、しっかりと自分を主張することができ円滑な他者との関わりをもつことが可能となっていることも示唆される。

### (3) 性差について

まず、本研究で使用した尺度についてふれ合い恐怖の心性においては、顕著な男女差がみられなかったが、自己愛傾向は女性よりも男性の自己愛傾向が高いという結果となった。小塩（2004）によると、自己愛傾向に関する先行研究では男女でNPI-S得点に有意な差がみられないと報告されているものと、男性の方が女性よりも有意に得点が高いと報告されているものがある。ただし、男女に有意な差がみられないと報告されているいずれの研究においても、男性の方が女性よりも得点が高い傾向にあることから、先行研究に一致する結果となったといえる。このことから、自己愛傾向に関して男性の方がその傾向が高いという仮説1は支持され、過去の知見を支持することとなった。ふれ合い恐怖心性において、男女間に有意な差が出なかったという結果は、ふれ合い恐怖の心性というものが性差ではなく青年期という特定な期間に出現するサブクリニカルな症状の1つだと考えられる。

### (4) 今後の課題

以上のように、今回の主題である「ふれ合い恐怖の心性」と「自己愛傾向」の関連に関しては、先行研究と同様に負の相関を得られたが、その数値は全体的に低いものだった。清水・海塚（2002）による「自己愛傾向」と「対人恐怖心性」との関連を調査した研究では、これらに有意な負の相関が得られている。しかし、今回の結果から「ふれ合い恐怖の心性」と「対人恐怖心性」は異なったものであるという岡田（1993）の指摘からも、「ふれ合い恐怖」の研究に関して、「対人恐怖心性」の先行研究とは異なった視野が今後必要となってくるのではないかと考えられる。また、ふれ合い恐怖が青年期に特有のサブクリニカルな症状として提唱されるようになり、今日で既に10年以上の年月が経過していることから、現代の青年により密接したサブクリニカルな症状の可能性の検討、そして自己愛傾向以外とふれ合い恐怖との関連に

ついでに調査も今後の課題として挙げられる。そして今回の調査のターゲットとした調査対象は、最もふれ合い場面が多くてふれ合い恐怖が発症しやすいと想定される大学生であった。そのため今後は、より幅広い年齢層を対象とすることで、ふれ合い恐怖の形成からその克服までの一連の流れを掴むことを目的としたい。そして山田ら(1987)は、ふれ合い恐怖の事例の特徴として、母親による支持など母性的援助を借りることで対人関係を深めることができることから、自立した葛藤処理能力の欠如や、母子関係からの分離不全を指摘している。このことから従来型の対人恐怖が、青年期の自己意識の高まりや親からの心理的離乳などの心理的課題に直面する過程で発生する(永井, 1994)ことと比較して、ふれ合い恐怖がより未熟な発達段階にとどまっていることが考えられる。それゆえに、今後の「ふれ合い恐怖」に関する研究では今回の質問紙法に加えて、「ふれ合い恐怖的心性」が高い群に対して母子関係や生育史などを面接や投影法などを使って検討する必要がある。青年期は父母からの精神的離脱と個の自立が基本的な課題となり、そのため臨床的な症状のみならず、今回のテーマとした「ふれ合い恐怖」といった様々なサブクリニカルな症状が想定される。以上のことから今後の「ふれ合い恐怖」に関する研究には、「ふれ合い恐怖」を包括的に理解するための理論モデルの構築と検証を行うことが、今後の大きな課題であり、またそれが青年期の心的問題に関する援助に繋がることが予期されるといえる。

### 参考文献

- 伊藤洸 1992 コフォートの自己心理学 心理臨床大辞典 培風館 pp107-110.
- 岡田努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関連 発達心理学研究 第4巻 第2号, 162-170
- 岡田努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究 9, 21-31
- 岡田努 2002 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究 第10巻 第2号
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み 教育心理学研究, 50, 261-270
- 小塩真司 2004 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 上地雄一郎・宮下一 2004 もろい青少年の心 北大路書房
- 山田和夫 1992 ふれ合い恐怖 芸文社
- 川崎直樹・小玉正博 2007 親和動機のあり方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向 パーソナリティ研究 第15巻 第3号 301-312
- 清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 2007 青年期における対人恐怖的心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究 第78巻 第1号 pp.9-16
- 中島啓之 1998 青年期の逸脱行動と自己愛 辻井正次(編) 現代青年の理解の仕方—発達臨床心理学的視点から—ナカニシヤ出版 pp. 169-180.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 1987 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報):ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23 (2), 206-215

## 資 料

## 大学生意識調査

このアンケートは皆さんの友人関係に関する意識を調査するものです。結果はすべて統計的に処理されますので、個人がどのように回答を行ったかについて問題にしたり、公表したりすることはありません。各項目についてできるだけ正確に回答してください。

※記入についてのお願い

- ・ご回答にあたって、他の方とご相談されることなく、必ずお一人でお答えください。
- ・ご回答が終わったら、回答欄に記入漏れがないか、もう一度ご確認ください。

京都学園大学人間文化学部人間関係学科久保ゼミ所属  
秦 幸江

まず以下の質問にお答えください。

Q1. あなたの性別に当てはまるものに○をつけてください。

( 男 ・ 女 )

Q2. あなたは現在何回生ですか？当てはまるものに○を付けてください。

( 1回生 ・ 2回生 ・ 3回生 ・ 4回生 ・ 院生 )

Q3. あなたの年齢を記入してください。

(            ) 歳

## 現代大学生のふれ合い恐ろしい心性と自己愛傾向の関係について

選択肢の中から、普段のあなたに最も近いと思う番号に○印をつけて教えてください。

- 「全く当てはまらない」・・・・・・・・・・1  
 「あまり当てはまらない」・・・・・・・・・・2  
 「どちらともいえない」・・・・・・・・・・3  
 「どちらかという当てはまる」・・・・・・・・4  
 「とてもよく当てはまる」・・・・・・・・・・5

1. 友達と2人きりでいる場面は苦手だ [1・2・3・4・5]
2. できれば食事は一人でとりたい [1・2・3・4・5]
3. 人と雑談するのは苦手だ [1・2・3・4・5]
4. 昼食は友達と一緒に食べるのが好きである [1・2・3・4・5]
5. 友人数人でいる場面は苦手だ [1・2・3・4・5]
6. 友達と一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ [1・2・3・4・5]
7. 人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ [1・2・3・4・5]
8. 人という場面で言葉がなくなってしんとしてしまわないかと不安になる [1・2・3・4・5]
9. 友達と一緒に食事をするのは好きでない [1・2・3・4・5]
10. 他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする [1・2・3・4・5]
11. 他人とちょうど良い距離をとるのが難しい [1・2・3・4・5]
12. 人といっても話題がなくて困ることが多い [1・2・3・4・5]
13. 一人で趣味に没頭したい [1・2・3・4・5]
14. 大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ [1・2・3・4・5]
15. 他の人は自分を受け入れてくれない [1・2・3・4・5]
16. 他人と親しくなるのはうっとおしい [1・2・3・4・5]
17. できることなら人とあまり関わりになりたくない [1・2・3・4・5]
18. 私は、才能に恵まれた人間であると思う [1・2・3・4・5]

- 20.私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う [1・2・3・4・5]
- 21.私は、周りの人たちより、すぐれた才能を持っていると思う [1・2・3・4・5]
- 22.私は、みんなからほめられたいと思っている [1・2・3・4・5]
- 23.私は、控え目な人間とは正反対の人間だと思う [1・2・3・4・5]
- 24.私は、周りの人たちより有能な人間であると思う [1・2・3・4・5]
- 25.私は、どちらかといえば注目される人間になりたい [1・2・3・4・5]
- 26.私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている [1・2・3・4・5]
- 27.私は、周りの人が学ぶだけの値打のある長所を持っている [1・2・3・4・5]
- 28.周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる [1・2・3・4・5]
- 29.私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ [1・2・3・4・5]
- 30.周りの人たちは、私の才能を認めてくれる [1・2・3・4・5]
- 31.私は、多くの人から尊敬される人間になりたい [1・2・3・4・5]
- 32.私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う [1・2・3・4・5]
- 33.私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている [1・2・3・4・5]
- 34.私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい [1・2・3・4・5]
- 35.これまで私は自分の思い通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う [1・2・3・4・5]
- 36.私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる [1・2・3・4・5]
- 37.機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい [1・2・3・4・5]
- 38.いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう [1・2・3・4・5]
- 39.私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ [1・2・3・4・5]
- 40.私は、みんなの人気者になりたいと思っている [1・2・3・4・5]
- 41.私は、自己主張が強いほうだと思う [1・2・3・4・5]

## 現代大学生のふれ合い恐ろしい心性と自己愛傾向の関係について

- 42.私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う [1・2・3・4・5]
- 43.私は、人々の話題になるような人間になりたい [1・2・3・4・5]
- 44.私は、自分独自のやり方を通す方だ [1・2・3・4・5]
- 45.周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので、  
自分でもそうなんだと思う [1・2・3・4・5]
- 46.人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる [1・2・3・4・5]
- 47.私は、個性の強い人間だと思う [1・2・3・4・5]

ご協力ありがとうございました。  
今一度記入漏れがないか確認した後にご提出ください。